

女たちの“余暇”の行方

田中 喜美子

生活に余裕のある女たちの多くは“優雅”に余暇を楽しんでいるように見える。この状況はいつまで続くのだろうか。

改めてこの疑問が浮上してきたのは、一本の電話のせいであった。

樋口恵子さん。いうまでもなく、日本のフェミニズムの大先輩。電話は私が1976年から編集にかかわっている主婦の投稿誌「わいふ」を初めて(!)彼女に贈呈した反応だった。

「もう、本当にびっくりしたわ。ここに出てくる妻たちは、私が知っている『高齢社会をよくなる女性の会』の女たちと全然違う。元気いっぱい、ためらいなくどこへでも出かけ、何にでも飛びつく行動力のある女たちばかりと感服していたのに、『わいふ』で見えてくる女たちは夫に気がねし、子育てに気をとられ、自分のことは二の次、三の次…。いったい、どっちが本当の日本の女たちの姿なの？」

樋口さんの疑問に、私は一瞬言葉を失った。

しかし考えてみれば、不思議でも意外でもない。「高齢社会をよくなる女性の会」の中心メンバーも30～40代は子育てに忙しく、夫はモータースラリーマン、自分中心の活動は後回しであったに違いない。そしていま、世界中をとびまわる時間的・金銭的余裕のある彼女たちの活動が“働く”ことではなく“楽しむ”ことが中心になっているのは無理もない。しかしこの現実を肯定的に認容するのは、私にとって易しいことではない。

社会に直接つながる手段をもたず、夫の経済に寄りかかっている妻たちが“経済的自立”のみならず“精神的自立”を果たすのはほとんど不可能なことである。この現実はいたるところに転がっている。私がこの現実には苛立つのは、間違っているのだろうか？



PROFILE

たなかきみこ：早稲田大学仏文科卒。同大学大学院を渡米のため中退。帰国後、1976年より投稿誌「わいふ」編集に携わり、80年に(株)グループわいふ設立。93年には女性の政治冊子「ファム・ポリティク」創刊。2006年、「わいふ」編集長を次世代に譲る。著書は『自分を表現できる文章の書き方』（共著、毎日新聞社）等多数。